

○中 布奈由、舟中漏入之水也。新井氏云、舟人忌云、水入舟故避呼湯也。今俗呼爲阿加略。○中 按說文、作塗、云水入船中也。一曰泥也。又載冷字云、塗或从今、集韻云、洽銓同、知洽卽冷字之變。又按塗字、有二義、一則水入船中也、一則泥也。漢語抄、訓布奈由者、依水入船中之義。玉篇水和泥、唐韻水和物者、演泥也之義也。源君不引水入船中也、引水和物者誤。

〔類聚名義抄七〕厚ユトリ

〔源平盛衰記四十二〕義經解纜四國渡附資盛清經頸可上京都由事

判官源義中略、下知シテ、渡邊島ヨリ船ヲ出ス、吹風木ノ枝ヲ折立波蓬萊ヲ上、水手楫取吹倒サレテ、

足ヲ踏立ルニ不及ケレ共、究竟ノ者共ニテ舟ヲ乘直シ略、○中 傍風來レバ風面テニ乘懸眈ニ

ナレバ中ニ乘、隙ナク湯ヲ取ラス、舳ヲ打波摧ケテ艫ヲ洗、艫ヲ濟波イカニモ難叶ケレ共略、○下

〔和漢船用集十一〕艫板 正字通に曰、俗舳の字、或曰舟岸に泊に、岸を去ること丈ばかり、長板を船

の首に置て、岸と接して往來を通すと見へたり、是和に用る處と同じ、

艇板徐氏筆談、跳板類書纂要、獨木板道宋王陶談淵、一木脚道、又獨木板、並に同じ、後太平記に、歩の板を引渡しと

いへり、今歩板と書、又攝州灘舟にて神樂板と呼、

〔平家物語八〕水しま合戰

の殿教經、大音聲を上げて、いかに四國の者ども、北國のやつばらに、いけどりにせられんをば、心

うしとは思はずや、みかたの舟をば、くめやとて、千よそうのともづなへづなをくみあはせ、中にもやいを入、あゆみのいたをひきわたし、わたひたれば、舟の中は平々たり、

〔倭名類聚抄舟十一〕棧舸 唐韻云、棧舸緘柯二音、漢語抄云、加之、所以繫舟、

〔箋注倭名類聚抄舟三〕出雲風土記、豎加志、萬葉集、可志振立氏、卽是今舟人、亦植篙於水中、以繫舟、

謂之加之乎、不留、江戸俗謂涯岸可繫舟之處爲加之、蓋此轉也、或書作河岸、謂加波岐之之約、非是、

歩板

棧舸